

ヘラルト・ダーフィット作《カンビュセスの裁き》試論

—画中に描かれた牡鹿をめぐる—

藤村拓也（九州大学大学院）

現在、ブルッヘのフローニンゲン美術館に所蔵されているヘラルト・ダーフィット作《カンビュセスの裁き》（1498年完成）には、ペルシア王カンビュセスの命により、不正を犯した執政官カンビュセスが逮捕され、皮を剥かれるというおぞましい物語が描かれている。ただし、同市の市庁舎に飾られていた本作は徒に残虐性を衒うものではなく、施政と司法に携わる人々に対して訓戒と正義の規範を呈示することを目的としていた。同様の役割をもつ作品は一般に正義図（あるいは裁判画）と呼ばれるが、ダーフィット作品には君主にむけられた政治的メッセージが付与されている可能性が指摘されている。

しかしながら、三回にわたる市当局から画家への支払いを記した会計記録の解釈や、科学調査によって判明した下絵と完成時の違いが本作の議論を複雑なものにしており、上述した意味内容の政治性を否定する論考も発表されている。歴史学をはじめ、文献学や科学分析などをふまえた多角的な考察がおこなわれているにも関わらず、本作には未だ議論の余地が残されているのである。

そこで、本発表では先行研究の成果を参照しつつも、今まで看過されてきた本作の細部に注目する。それは処刑の繰り返し広げられている都市空間の外に広がる木立である。一見するとこの細部は自然景観に見えるが、精察するとその奥は壁で閉じられ、牡鹿が木蔭にたたずんでいる姿が確認できる。まず、このモチーフの意味内容をいくつかの事例・作例から明らかにし、考察の糸口としたい。先んじて言えば、この牡鹿は本作の解説において重要な役割を担っていたと考えられるのである。

また以上の考察の過程で、本作に描かれたいくつかのモチーフの意味内容をひとつに同定することが困難であることも明らかとなるが、この不安定な状況は絵画を読み解くプロセスと、そこから生じるメッセージがひとつではないことを示唆しているともいえる。そして、このような解釈の複数性は本作が公的な空間である市庁舎に置かれ、不特定多数の目に触れていたことをふまえるならば、重要な意味合いを持つのではないだろうか。

つまり、画家あるいは注文主が本作制作にあたっていくつかの受容者層を想定し、各層の期待の地平によって各モチーフの解釈が変化するように企図していた可能性も十分に考えられるのである。以上の可能性をふまえ、あらためてブルッヘの政治的・社会的コンテキストからダーフィット作《カンビュセスの裁き》を考えてみたい。その結果、前述した画中の最奥部に描かれた牡鹿が、本作の最も重要かつ巧みに隠されたメッセージを読み解くための鍵である可能性が浮かびあがるのである。